

六〇年安保闘争を振り返りこれからの糧に

木村雅夫

反安保実では、六〇年安保五〇年を迎え、「もうやめよう! 日米安保条約」連続学習会を企画し、第一回を三月一三日の夕方文京区民センターで開催した。報告は、六〇年安保時の前全学連委員長塩川喜信さん(ちきゅう座)と樺美智子さんの友人の加藤克子さん(立川自衛隊監視テント村)から、二人の当時のお話を聞き、参加者三五人で六〇年安保の時空を共にし、これからの闘いを考えた。

塩川喜信さんの話

十歳の時に敗戦を迎え、国内でもソ連でも多くの価値観の変化を経験した。いつの間にか「日米安保」が「日米同盟」になり、密約と密議の上に築かれた日本政治と日米関係を憂える。

旧安保(一九五一年締結)と新安保(六〇年改定)の条文を比較する。新安保のタイトルに相互協力が加えられた。旧安保は5条で新安保は10条と交換公文でできている。前文を比較すると、旧安保では日本国が固有の自衛権を行使する有効な手段を持たない、日本国は防衛のための暫定措置として米軍駐留を希望し、日本国が攻撃的脅威となり軍備を持つことを常に避けるとされ、新安保では国連憲章が定める個別的又は集団的自衛権の固有の権利を有していることを確認し、両国が極東における平和と安全の維持を考慮する、としている。新安保は「国連憲章に定める」を多用している。

一九六〇年までの戦後政治史を振り返る。「逆コース」が進み立川基地拡張に反対する砂川闘争が闘われる中で五七年の岸とアイゼンハワーによる日米共同声明(六月)が発表され安保改定が始まった。A級戦犯容疑者・岸信介内閣の登場による民主主義破壊の脅威と「戦前の復活」への危機意識が学生の間広がった。一方、六〇年安保改定前年に出た伊達判決が米

国政府に危機感を持たせ、外相と最高裁長官に圧力をかけて跳躍上告、最高裁判決をもたらした。高度に政治的な事案に対して合憲・違憲の判断をせず憲法判断を回避したこの時の最高裁の判決が、後々の違憲判断回避の厚い壁になった。

加藤克子さんの話

野尻湖で樺美智子さんとボートに乗った写真が手元に残っている。私は、一九五七年からの勤務評定反対闘争、警察官職務執行法闘争、安保ブンド(共産主義者同盟)の結成を、一般学生として経験した。メルクマールになったのは、五九年一月二七日の国会構内突入、六〇年一月一五日の羽田闘争(岸首相訪米)、四月二六日の教育学部学生大会の国会正門前闘争、五月一九日の会期延長強行採決以降の自然発生的な首相官邸包囲の闘い(逮捕者)、チリ津波、六月二日の国会デモ(初めて放水を浴びる)、一五日の南通用門からの国会突入(樺美智子さん虐殺)、一九日自然承認の日の国会回りのデモ。韓国の四月学生革命(李承晩辞任、米国亡命)が私たちに強い影響を与えた。指導部より一般学生が突出して運動にうねりが起こったこともあった。樺美智子さんの死の影響は大きく、大学葬があり、共産党系の御茶ノ水でのカンパがばんばん集まった。北大路が「我々は敗北した」と演説した。

ブンドは「安保ブンド」でありそこで留まった。「日本資本主義の復活」論と「対米従属論」(共産党系)との対立があった。その後の高度成長期を振り返ると「復活」が正しいように思われたが、最近の「密約」の経過を見ると、「復活」と「従属」が重層的に関係していたと感じる。両者の把握が浅かったか。

学生層は、前衛的な役割への認識が強く、いわばエリートで、闘争に行

くのも不遜にも「オルグ」と呼んでいた。人びとの全学連への共感や政党の枠を越えた職場や地域からの反安保闘争への立ちあがりには「戦争の記憶」に裏打ちされていた、「戦後民主主義の欺瞞批判」にもかかわらず「戦後民主主義の発露」でもあった、と思う。ブンドは何度か誤りを犯しているけれども、あの闘いの中で学生や人々の立ちあがりに「乗り越えられた」。その後、ブンドの分裂騒動に与することもせず、「挫折」を理由に、大学院で勉強したり子どもを生むとかした。立川の憲法集会で、韓国の闘いの展示をしたときに、四月革命や光州蜂起が連綿と受け継がれていることを感じ、なぜ日本はそうではなかったのかと考えた。それは安保運動で新しい前衛を目指した者たちの弱さだったのか、また立ちあがった全体的な安保闘争の弱さということもあるのかと思うが、この辺は課題だと感じている。

六〇年安保は私にとっては人生のひとつの経験でしかないと考えている。確かに教訓とか希望とかを積み出す源泉にはなっているのだけれど、でも安保だけの人生ではなかった。出産は6・15より楽だった。東大のデモ隊列は南通用門を学部順に入るが、樺さんは前の方で、私はうしろからも学生が入ってきて息苦しかった。七〇年安保闘争や三里塚を経験して立川のテント村結成に至った。砂川闘争は今も連綿と続いている。六〇年安保も突然起こったのではない。反核の広島、長崎の運動ほかで準備されてきた。

権力は決して盤石のものではなく、倒れる、壊すことができるものだという印象を広く共有された。その実感を多くの人とともに獲得するためにも、現状分析は大事だし、日々の活動は大事だし、展望を持つための思索、討論する同志を得ることが大事だと思う。

質疑・討論から

お二人の話のあと一時間近く活発に質疑討論、参加者からの積極的な経験談披露もあり、多くの参加者で六〇年安保の時を思い起こした。一部を次に紹介する。

【沖縄との関係】

参加者 六〇年安保時代は沖縄の基地の問題には無自覚だったのでしょか？

塩川 難しい問題ですね。五六年頃の砂川基地拡張反対闘争をやっているのを阻止したが、伊江島では米軍ブルドーザでやられていた。残念ながらその時に僕らは伊江島の問題を敏感にとらえてはいなかった。知識として知っていて連帯と言いつつ、行き来にパスポートが必要な沖縄との連帯を突き詰めて考えるのとは違う。部落解放同盟との連帯もそうだった。学生運動はエリート大学で盛んで、学生にエリート意識があった。もつと自分の中を見ろと考えさせたのが後の学園闘争だったのでは。

加藤 小熊英二の「1968」に、日本にやってきた米国の次官が沖縄に追い返された時に、全学連の一員と参加していた沖縄の学生が「沖縄に逃げ帰った」と言いつつ拍手が起こった、沖縄への意識が無かったと書いている。が、砂川闘争の時は、パスポートを取って沖縄から応援が来ている。横田の騒音訴訟をやった福本という元憲兵はずっと沖縄戦の直前に沖縄に行ったことがあり、ずっと自分の負債のように思っていて、頻りに沖縄に通って沖縄の訴訟準備に重要な役割を果たしたがそれは七〇年代から八〇年代。基地を抱えている現地独自の関係というのは、沖縄が差別されているからというのではなく、同じもの同志としての意識はあった。私たちが七二年に、沖縄への自衛隊進駐の反対闘争で米軍立川基地にデモ隊が基地の中に入ってそこで逮捕者が出た。自衛隊に向けた反軍放送を七〇年代に始めたが、その時の最初の特集は沖縄問題だったと思う、やつとその頃になつてそういう意識を持つようになった。

【挫折感(2021)】

参加者 加藤さんが6・15で挫折と言っていたが、強行採決されて議会を通ったが、なぜそれが挫折につながるか分からない。そんなに議会に対する幻想があったのか？ それで戦後民主主義の欺瞞性か？

加藤 樺美智子が殺された後、六月一七日の「国会収拾に関する七社の共

同宣言」が国会の正常化による事態の收拾を訴えた。日本で学生運動が高揚していくことに対して、民主主義を否定する・彼らのやっていることは神風と同じだと欧米メディアは否定的だったと「1968」で紹介されている。中国のメディアは樺さんを讃えるような文章を流していた。一方で、反安保は風俗・はやりだったけれど、学生運動は疲弊していた。クジラを食べて栄養をつけようという演説を弁護士が全学連でやった。やはり、国会に向けてデモをするか否かが争点になっていて、その国会で安保が自然成立するというのは、すごく大きな桎梏だった。今は、立川テント村の反戦ピラ弾圧で最高裁判決が出て私たちが負けても、国連人権委員会があるやとか最高裁がそう言っても私たちは認めないよと今思えるが、六〇年の頃はそういう風では無かった。

塩川 当時のブンドの国会突入と街頭闘争主義に対して僕は批判的立場に立っていた。特に一月二七日（五九年）の時は、僕らの党派が都学連の委員長と書記長をやっていたから、都学連部隊が真っ先に国会に入ってしまった。そのことについて、指導部からかなり厳しい批判を浴びた。ブンドは、学生が街頭でできるだけ過激にやればやがては労働者全体が起きるだろうというのでやったのだと思う。一方で炭労闘争が闘われているが実際には負けている。国労の新潟闘争とか、合理化が進行していて、大きな労働組合の闘争がほとんど後退していた。そういう時に国会周辺が騒然としても全体の力関係というのは変わるはずがない、そういう立場に立っていた。だから、安保が自然成立して六〇年安保が敗北したあとの打撃というのはそれほど大きくは無かった、と我々の方は思う。むしろ全学連ブンドがあれだけ派手に闘った訳だけれども、その後どこが伸びたかという点と民青と社青同、共産党と社会党の青年組織なのです。ブンドも革共とも全体の高揚に組織が追いついて行かなかった。それをものすごく感じました。

【マス・メディアに(こ)い]

参加者 マス・メディアはどういう報道をしていてどういう風に運動に影響したか？

加藤 週刊誌は学生に同情的だった。6・15ではラジオが闘争を中継していた（「6・15事件・実況中継」ラジオ関東報道部）。女子学生が死んだとラジオで聞いて、私の母が駆け付けて私の安否を確認したぐらい。テレビで無くてラジオでかなり伝えられた。新聞はあまり見ていなかったが、七社共同宣言を見るとどうしようもないと思う。

塩川 ただ、今のメディアと全然違うのは、平均して一社が二、三週間に一回は全学連の書記局に取材に来た。彼らは自分たち学生や労組を取材するのは賊軍だと言っていた。今のメディアから賊軍が無くなっている。この前の1・30の沖繩の集会（1・30全国大会）に六〇〇人以上日比谷野音に集まったけれど、朝日に小さな記事で載るだけ。しかも、賊軍をやっていないものだから、社会部の記者にはいい深みのある記事を書けない。今のメディアは反体制的な運動を報道すること自体が危険であるというよな立場に立っているのではないか、そういう感じがする。

【安保闘争と非暴力】

参加者 ハガチー事件のときに、ちょうど現場に居合わせた。国民的盛り上がりがあった。

加藤 ハガチー事件の話ですが、日本帝国主義の復活と対米従属と、その捉え方の違いがある。岸が行く時は、羽田まで行って阻止しようとするのだけれど、アメリカが来たときは行かなかった。それ以上に問題だと思っているのは、安保闘争について書かれた歴史が、例えばハガチーを書いたのが6・15を書いていないとか、党派の利益で歴史が書かれることに対しては批判していかないとけない。

参加者 非暴力運動についての認識をお聞きしたい。

加藤 やはりスクラムで抵抗する。6・15もそうだった。六月二日に久しぶりに国会デモがあるという時に、スクラムを組んでひたすら警官隊を押し退けていった。その時に警官隊がぱつと引いて、放水を受けた。それが本当に目覚ましい経験というか。その前に中国の辛亥革命の時のか何かの闘い

の映画を観ていたが、こういうことが日本で自分が経験するとは思わなかった。私はその放水で眼鏡が壊れて病院に連れて行かれたりしたが、例えば首相官邸の門の上に立って、そこから下に居る警官隊を攻撃するのはなくて、自分の身を投じて抵抗するというそういう闘いでした。石を投げると言うようなこともなかった。

塩川 石は投げなかった。

加藤 例えば南通用門の門を開けるのにロープを用意することになったのですけれども、それを担当した大学自治会がそれをさぼった。それでロープ取り寄せに時間がかかって、その間に向こうの体制が整って、だから樺さんが死んだなんて議論があった。要するに、そのロープを用意すること自身が暴力的というような認識があつたような気がする。やはり非暴力です。

塩川 非暴力とは言わなかったね。

加藤 何と言った？

塩川 何とも言わなかった。結果としては非暴力だったけれど、「俺らは非暴力だ」とは言わなかった。

加藤 六七年の弁天橋の頃には、ゲバ棒を持った学生が登場した、それが本当に目覚ましい変化だと印象に残っています。

参加者 みんな素手でボンネットや何かを叩いていました。砂川闘争では棧俵（さんだわら、米俵の丸いところ）をおなかくくり付けてスクラムを組んで闘ったと聞きました。

【アメリカをどう見えていたか】

参加者 その頃のアメリカに対する認識をお聞きしたい。

加藤 アメリカのイメージですが、戦後非常に窮乏している日本にとって、アメリカ映画というのは家族生活して車に乗ってまるで天国みたいで、あそこと闘って勝つはずないよと思つた。と同時に、やはり日本が占領されている、そしてサンフランシスコ条約があつて基地日本というのがとても強いのしかかつていた。基地の町立川で育つた私が特にそうかも知れない

が、優越感を持つて闊歩して女性を買つて、私といくつも違わない女性が食べる道を探して立川の街にやつてきて。そういうことに対する根強い反感も私は持つていました。

塩川 終戦の時に僕は丁度十歳だった。駿河湾に近い村に疎開していて、若いGIが村まで遊びに来て、小学校の5、6段の階段をジープで駆け上がったが校長先生も文句を言わない。僕らにとっては、階段を上がるような車何ていうのはむしろ想像できなかったので、すげえなという感じだった。それと、ガムとかチョコレートをもらう友達がいる、ちよつともらうと食べたことが無いくらいおいしい。何ていうか加藤さんがいうのと同じで、向こうの豊かさに対してびっくりした。もうちよつと大きくなると、アメリカでは高校生でも運転免許を持つていそうだから、雑誌を見ると大きなリビングにテレビがあつて画面に野球が写つていて家族で観ている、すげえな。そういうアメリカの物質文明に対するあこがれと、アメリカの文学作品を随分読みました。それと同時に、沖縄の米軍基地を半永久的に接収するという内容のブライス勧告を沖繩で出されたり、葉巻をひろつていっている日本女性が射殺されたジェラード事件とか、中東政策に関するアイゼンハワードドクトリンが出たり、冷戦下にアメリカが次から次に出す軍事面でのやり方に対する反撥みたいなもの。ある意味ではアメリカ兵は格好いいと思つたり豊かだなどと思うのと、帝国主義的な政策に対する反撥の両面を持つていた。ただ、アメリカがきらいだという意識はあまりなかった。この政策に反対だというのはあつたけれど、アメリカに反対だというのはあまり無かつたなあ。

【安保闘争と市民運動について】

参加者 安保闘争が今日の闘争に何を学ぶことができるかを聴きに来た。市民運動という観点から、前衛とかオルグとか。六〇年安保のときの「声なき声」があつて最初の市民運動と位置付けていいと思います。そのあとにベ平連があつてききますね。「声なき声」のような市民運動に対して、どのような評価をされるかを知りたい。

塩川 僕は日本では市民運動が一九六八年頃の反公害闘争、地域運動から起こったと思う。ベ平連は、元共産党員も多かった、市民運動的になったのは六七、八年。学園闘争が無党派層を生み出した。それまでは、市民づらしていてもどこかに党派的利害を持っていて、僕自身はもともと第4インターで一九六四年に離脱して、今は無所属。六〇年の運動は、ブンド対革共同という対立構造の中にどっぷりつかっていたから、市民運動の流れでどうするとう総括の視点はほとんどない。ただ、今無所属でやっていて、党派に入っていると全然得られない自由さ、ある意味で無責任さでもあり、楽しさを感じている。ウェブサイトでちきゅう座をやっていて、そこに集まってくる人たちはほとんど無党派の人たち。

加藤 六〇年の安保運動と言うのは、党はひとつみたいな神話をくずすきつかけになった。それと、それについてだけでない、「思想の科学」がやっていたのは今の市民運動を盛んにしてきて、それがいいなと思っている。小林トミさんが中心になって「声なき声の会」を始めてそれがずっと続いた。ベ平連に繋がって行くこともあったのですが、私から見ると党派の人とは別に、自分で運動をやろうと考えるからには、自分が世界観を持つべきだ、それは党派だから持つべきなのではない。自分がこの世の中をどうとらえ、自分がこの社会についてどういうことを矛盾だと考え、それに対してどう闘っていくかというの、自分たちで考えること。そういう意味では、自分のやっているのは市民運動で政治的ではないですよみたいな、そういう風な姿勢は取りたくない。だからテント村も全然大きくならないのですけれど。でもその辺は自分なりのものを持たないといけない、いつもそれを探っていないといけない、と思つてやってきている。市民運動について、冷戦の崩壊とか、一党独裁とか、ソ連を守らなければいけないとか、そういう神話が崩れていった過程は非常に重要だし、ではどうするのかという時に私たちは政治的であろうとしなければいけないと思つている。

参加者 政治という特別の世界みたいな捉え方が特に女性に多い。だけど海外を見るとホームパーティーに行つても、お国の政治が生活とか未来に直

結している。だから、お天気のことを話すのと同じくらいに、こういう安保のことも何でも話さなくてはと思つて、できるだけ努力をしている。

(補足)

折しも、同時刻に文京区民センターの同じ階の別部屋で在特会(在日特権を許さない市民の会)の集会有り、廊下をついで分割し入場階段も別にしての開催(区民センターの意向)。私服・制服二〇人程が区民センター入口で来訪者の行き先案内、それを監視して非常に残念なことに気付いた。五〇歳という年齢でこちらに来る人(年上)と在特会に行く人(年下)とを簡単に仕分けできるので。少しは考えねば。

(文責・木村雅夫／反安保実)

「60年安保50年 もつやめようー日米安保条約」連続学習会●日程

- 第2回 四月三日(土)「米軍被害の実情から——地位協定の問題点」(終了)
報 告：芦澤礼子さん(米軍人・軍属による事件被害者を支える会関東)
- 第3回 五月一日(土)「日米安保体制と違憲判決——砂川からイラク派兵」
報 告：山口 響(ピース・プラン研究所)
- 第4回 五月二九日(土)「反安保の論理を検証する」
報 告：天野恵一十国富建治(いずれも反安保実)

いずれも、

時間：午後六時開場(六時半開始)

場 所：文京区民センター 3C (地下鉄春日・後楽園駅すぐ)
資料代：五〇〇円